

論文要旨

連歌生成論—式目のある文芸ということ—

生田 慶徳

本研究は、連歌が生成されていく過程を、式目を切り口にして論じたものである。式目とは、連歌の規則を箇条書きにしたもので、言葉の配置を制限して作品を理想的な展開へと導き、共通規範として制作・鑑賞の場に力を及ぼした。式目のある文芸という特殊性は、連歌研究においてより重視すべき視点だと考えられる。

本論文は次の5章によって構成されている。

第1章は序論に当たる。先行研究をまとめ、式目を切り口にするものの意義、それによって具体的に何が見えてくるのかを述べた。

第2章では、式目の解釈と運用の実態に焦点を当てた。第1節では、文亀元年（1501）に肖柏が制定した式目書『連歌新式追加並新式今案等』を取り上げ、特に明文化されていない部分について解釈を掘り下げた。暗黙の規定の存在と当座の裁量の余地を示し、式目とは、普遍・自明の原則ではなく、時代・作者による振れ幅を想定して取り扱う必要があると指摘した。第2節では、14世紀から15世紀にかけて、式目における花の句数が3句と4句の間で揺れ動く現象に注目した。心敬著『私用抄』を足がかりに、花3句説・花4句説が並立した背景、最終的に花4句説が優位に立った要因を論じた。心敬は花4句・花3句・花2句以下の形を認め、柔軟な姿勢をもって両説を止揚したことを明らかにした。また、16世紀に花4句説が定着したのは、花の句の定義を拡大して去嫌に抵触しやすいという従来の欠点を克服し、ひとつの懐紙にひとつずつという簡明さを実現したためだと結論づけた。第3節においては、宗祇（1421-1502）・宗牧（?-1545）・紹巴（1524-1602）らが自らの作品に付した注、いわゆる自注の中で、それぞれが式目に言及することの意義を検討した。宗祇は式目を遵守する苦心を語ることで付句の評価を相対的に高めようとし、宗牧は初学者に向けた作法指導として式目に対する分別を説き、紹巴は式目に強い関心を寄せる連歌作者の不審に対処しようとしていた。こうした式目と自注の関係の変化は、式目が次第に実作に対して大きな影響力をふるうようになったことを表している。

第3章では、式目によって連歌の行様（展開）を分析し、構成意識を追究した。第1節では、現存最古の百韻の完本、冷泉家時雨亭文庫蔵『永仁五年正月十日賦何木百韻』（1297成）の行様を、『連歌本式』によって表に一覧化した。『連歌本式』は、明応元年（1492）、兼載が鎌倉時代の本式を復元して制定したものである。『永仁五年正月十日賦何木百韻』の展開は『連歌本式』に則る部分が多く、『連歌本式』は鎌倉時代の本式の姿をある程度正確に伝えていることが判明した。また、『永仁五年正月十日賦何木百韻』は、雑の句が多く、花・月を詠む回数が極端に少ないという特徴があるとわかった。第2節では、題材の転換点に当たる「のけ所」に着目し、二条良基が一座する『石山百韻』と宗祇が一座する『新撰

菟玖波集祈念百韻』の行様を比較した。良基の時代は、「のけ所」が見せ場として意識され、句数の上限いっぱいまで同一の題材を連ねた後、しばしば実力者が雪月花を用いて趣向を凝らした句を詠み、劇的な変化を楽しんだ。これに対し、宗祇の時代は早い展開が好まれ、句数の上限に至る前に題材を転じるようになる。次の句が付けにくくなる状況を避け、会席を円滑に進行するためであったと考えられる。

第4章では、式目が本文生成に与える影響を考察した。第1節では、応永期(1394-1427)の原懐紙群である看聞日記紙背連歌懐紙を取り上げた。本資料には、重ね書き・見せ消ちなど多くの筆削が見られる。そのうち、連歌特有の事情による訂正、すなわち指合(式目違反)を解消するために行われた訂正を指摘し、指合となる理由、訂正が行われた時点などを検討した。その結果、次の句が付く前の訂正と、次の句が付いた後の訂正があり、原懐紙に対して段階的な処置が施されていることが判明した。第2節では、心敬の代表作『河越千句』(1469か1470成)の転写本間に不自然な異同が発生した原因を探った。単なる誤写とは考えられない異同と式目の関係を調査すると、内閣文庫本には式目に違反する形の独自の本文が多く残り、一方、連歌合集本系統ではそれらが式目に合致する形になっていることがわかった。心敬は式目を比較的ゆるやかに運用した連歌師であること、千句連歌は公的な盛儀で清書が行われた可能性が高いことなどから、内閣文庫本は式目違反の残された原懐紙の形を伝え、連歌合集本系統は式目違反を正した清書懐紙の形を伝えていと推定した。

第5章は結論に当たる。第2章から第4章の考察をまとめ、結論と今後の課題を述べた。

以上でみてきたように、式目と実作の関係からは、連歌文芸における文芸性と芸能性の交錯が、具体的に見えてくる。連歌を生成する言葉と場は、式目という原理によって繋がれているのである。